

2019年3月期 決算説明会 質疑応答 (要旨)

1. 収支に関して

Q1)

- **航空事業における第4四半期の実績について、収入・費用別に計画との主な差異を教えてください。**

A1)

- 航空事業における第4四半期単独の実績を計画と比べると、売上高・営業費用の差異は、以下の通りです。

- ・売上高 : 約▲70億円
- ・営業費用 : 約+30億円

売上高に関しては、国際貨物において、米中貿易摩擦や中国経済低迷の影響により、中国発着路線で需要が減少しました。国内貨物と合わせると、貨物事業全体で計画比約▲70億円となりました。

営業費用は、航空機部品の評価減を整備費に計上したこと等により、計画を約30億円上回りました。

以上の結果、第4四半期単独の営業利益は、計画比で約▲100億円となり、年度累計では計画並みの水準となりました。

Q2)

- **旅客事業における第4四半期の売上高について、計画との差異を教えてください。**

A2)

- 国内旅客、国際旅客における第4四半期単独の実績を計画と比べると、売上高の差異は以下の通りです。

- ・国内旅客 : 約+10億円
- ・国際旅客 : 約▲30億円

国内旅客は、第3四半期に引き続き、堅調な需要を着実に取り込み、計画を上回りました。

国際旅客は、海外エアラインの生産量が増加したアジア方面等で需要が伸び悩み、計画を下回りました。

また、その他収入については、主にカード・マイル収入の増加により、計画を約30億円上回りました。

2. エンジンメーカーとの補償交渉に関して

Q3)

- **ボーイング787型機のエンジン問題に対する補償交渉の進捗について教えてください。**

A3)

- ボーイング787型機のエンジン問題を受けて、エンジンメーカーから改良型パーツの優先的な供給を受けるサポート体制を構築しながら、補償交渉を着実に進めてきました。その結果、一定程度の補償金を特別利益として計上する等、今般合意した内容を2018年度の実績に取り込みました。エンジンメーカーとの契約上、具体的な補償内容については開示ができませんが、合理的で妥当な補償を得ることができたと考えています。

3. 2019 年度の計画に関して

Q4)

- **国内旅客において、下期の座席キロが前年度から減少する計画となっている背景を教えてください。**

A4)

- 2018 年度と 2019 年度における下期の座席キロを比較すると、以下の通り、ボーイング 787 型機のエンジン問題による影響に差異があります。
 - ・2018 年度下期：B787 型機の稼働が減少、B777 型機(大型機)の稼働が増加
→ 大型機の構成比率が高まり、前年に比べて座席キロが増加
 - ・2019 年度下期：改良型パーツへの交換が進むことで、B787 型機エンジン問題の影響が徐々に解消
→ 前年に比べて B787 型機(中型機)の構成比率が高まり、座席キロが減少これらの影響により、2018 年度下期の座席キロは前年比+2.6%となりましたが、その反動により 2019 年度下期の座席キロは減少する見通しです。

Q5)

- **国際貨物について、下期の有償貨物トンキロが前年から約 3 割増加する見通しとなっていますが、主にどのような要因があるのでしょうか。**

A5)

- 下期の有償貨物トンキロが前年から大きく増加する要因は、主に以下の 2 点です。
 - ① B777F 型機(大型フレイター)の導入
2 機導入による効果は、主に下期から成果となる見込み
 - ② B787 型機エンジン問題による影響が徐々に解消
改良型パーツへの交換が進むことで、一部路線で発生している貨物搭載制限が徐々に緩和される見通し

Q6)

- **旅客事業に関して、第 1 四半期の需要動向を教えてください。**

A6)

- 国内旅客は、引き続き堅調な景気や需要に支えられ、旅客数は計画並み、単価は計画を超える水準で推移する見通しです。
- 国際旅客は、旅客キロでは計画達成を目指し、三国流動需要等を積極的に取り込んでいく方針です。アジア方面において、海外エアラインの生産量が増加していることにより需給のギャップが拡大し、イールドは計画を若干下回る動向をみせています。但し、訪日客を中心にマーケット全体の需要は伸び続けており、2019 年度はラグビーのワールドカップや G20 等、多くのイベントが開催される予定です。第 2 四半期に向けて、着実に需要を取り込むべく、更に営業を強化していきます。

Q7)

■ **LCC 事業における売上高、営業利益の見通しについて確認させてください。**

A7)

■ LCC2 社会計の売上高、営業利益の見通しは、以下の通りです。

・売上高 : 1,020 億円

・営業利益 : 50 億円

売上高は 2018 年度実績から約 85 億円の増加、営業利益は同約 20 億円の増加を見込んでいます。

Q8)

■ **営業費用が大きく増加していますが、特にどのような費用が増える見込みでしょうか。**

A8)

■ 2018 年度と比べて、費用計画において特徴的なものは、主に以下の 2 点です。

① 機材関連費用（機材賃借費、減価償却費）

2018 年度実績に比べ、約 9 パーセント相当、およそ 250 億円の増加

② 人材関連費用（人件費、外部委託費）

2018 年度実績に比べ、約 8 パーセント相当、およそ 350 億円の増加

上記については、2019 年度の生産量増加に連動する費用に加え、2020 年度以降のネットワーク拡大に備えた前倒しの費用も含んでいます。

以上